

《論 文》

郭沫若家信集『桜花書簡』への訂正と補遺

郭 平 英

(劉 建雲訳)

解題

- (一) 十二通の手紙の日付についての推定
 - (二) 家信補遺、及び郭沫若が離京し日本に渡航した日時に関する考証
 - (三) 郭翊昌と郭沫若の若い時代の文献資料
- 附表

解 題

郭沫若（1892-1978）は魯迅と同じく、日本留学を通じて近代文明の啓蒙を受け、時代の苦難を遍歴して世界にも名を馳せた文豪の一人である。彼は中国の現代文学者・歴史学者・古文研究者として名高いだけでなく、國務院副総理・国家科学院院長・全国文学芸術連合会主席・全人代常務副委員長・中日友好協会名誉会長などの要職を歴任した政治家・社会活動家としても知られている。その86年間にわたる長い生涯の中で彼は日本と密接な関係を持っていた。青年期はかつて日本に10年間も留学し、その間、日本人佐藤をとみ（中国名は郭安娜）と巡り会い、結婚し、5人の子供も育んだ。壮年期はさらに亡命で日本に10年間も生活していた。

郭沫若についての研究は中日ともに多方面に渡り、膨大な成果を挙げている。しかし、郭沫若の日本生活20年間、特に青年期の日本留学について、本稿が取り上げた唐明中・高文斌編注『桜花書簡 郭沫若一九一三年至一九二三年家信選』（以下本稿著者の記述に従い『家信選』と略す）が刊行された1981年までに、その実態がほとんど知られることはなかった。著者も指摘したように、同書が収録した66通の家信は、留学時代の郭沫若を知るのに貴重な史料を提供し、沫若自伝第一部『少年時代』と、第二部『学生時代』との間の空白を埋めるものとなった。その後、日本でも名和悦子の「岡山における郭沫若」（『中国研究月報』No. 570、1995. 8）と武継平の『異文化のなかの郭沫若』（九州大学出版会、2002. 12）のような、同『家信選』を「基本資料」に使った重要な研究が相次いで世を問われた。とくに、名和悦子の近代日本社会事情に基づいた考察は、同書が収録した66通の手紙の日付に関してのさらなる考証に重要な刺激を与えたと思われる。

本稿は、『家信選』について新たな考訂を行った未発表の論文である。中国で近く発表が予定されている。本稿の著者は中国で有名な歴史研究者であり、また郭沫若の実子でもある。ご本人は長年北京にある郭沫若記念館の館長を担当し、直接大量な一次資料に接するチャンスがあるのみならず、郭沫若の性格や幼少期の生活環境・青年時代の夢などに最も詳しい、権威的な存在と言える。訳者はご本人と直接お会いする縁はまだないが、本稿を読んでいて、著者の学問を修める堅実さが伝わってくる。これは学術腐敗云々と言われる昨今の世の中でいかに大事なのかは、同じく一研究者としてつくづく思った。

ついでに、1981年刊行の同『家信選』（本稿では1992年刊行の保存版と区別して鉛印本と言っている）は、その日本語版として去る2005年6月に『桜花書簡 中国人留学生が見た大正時代』（大高順雄・藤田梨那・武継平訳）が東京図書出版会より刊行された。この翻訳本は、『家信選』の第五十通と第五十四通の日付を新たに考訂し、並べ順をそれぞれ第九通と第六十二通に調整した。第五十通の時間に関して、本稿の見解と一致するが、第五十四通は異なる。また、第五十七通については、名和悦子の研究、前掲「岡山における郭沫若」を踏まえた1992年の保存版における編者唐明中の自らの訂正に基づいて年代を修正したが、並べ順は調整していない。それから、鉛印本の第二十通の日付を1915年3月より1914年12月に、第五十一通の日付を1917年7月より1917年6月に修正した根拠もはっきりしない。

なお、本論文の翻訳に当たって加治敏之先生より多くのご教示を賜り、坂本忠次先生と加治敏之先生が日本語を直して下さった。記して謝意を表する。（訳者）

（一）十二通の手紙の日付についての推定

1981年8月に四川人民出版社により刊行された、唐明中・高文斌編注『桜花書簡 郭沫若一九一三年至一九二三年家信選』（以下『家信選』と略す）は、郭沫若が故郷の巴蜀を離れ天津を経由して扶桑に渡航した1913年秋から、九州大学卒業前の1923年初に至る、日本留学時代の十年間に渡る66通の家信を収録している。これらの手紙は、留学時代の郭沫若の抱負・学習成績・生活嗜好・家族との絆などを知るのに貴重な史料を提供し、沫若自伝第一部『少年時代』と、第二部『学生時代』との間の空白を埋めるものとなっている。

66通の書簡の原本はほとんど年代を明記しておらず、一部は月日さえもはっきりしていない。そのため、時間の考証と推定は肝心なこととなるが、容易なことではない。こういう場合、封筒や葉書にある消印は時間を判定する重要な証拠となる。しかし、封筒も残っておらず、証拠となる消印もない手紙については、手紙の内容から手がかりをさがすしかない。『家信選』は、時間考証の面で大きな努力を払い、全体の脈絡を整理したが、なかにはなお再検討すべきところが残っている。

1992年9月、『家信選』の保存版が三環出版社より刊行され、この保存版は66通の家信の原本を全部影印しており、装幀精美で、印刷部数が少なく、収蔵の珍品といえる。これま

た手紙に関する時間の推定考証や、筆跡文字の識別、句読点の推敲に便宜を提供している。以下12点は、この保存版に影印された郭沫若の直筆をもとに、1981年8月四川人民出版社出版の鉛印本と付き合わせながら行った、家信の年月および手紙に出た関連の時間に関する考察である。

第三十二通 (p. 84)

この手紙は1915年10月21日に書いたものであることについて異議はない。ただ最後の新旧暦の日付の対応に作者の間違がある。

手紙の頭に「私は岡山に来てもう1ヵ月以上経ちました」という言葉があり、封筒にまた民国四年の消印が三つあるので、この手紙は1915年のものと判明できる。ただ、最後の日付、新暦は10月21日となっていて、『中西回史日曆』（陳垣著、中華書局1962年6月修訂増補版）を調べれば旧暦の9月13日に該当する。手紙の「九月十二日」は多分作者の筆の誤りである。

第三十四通 (p. 89)

この手紙は1916年2月11日ではなく、1916年1月9日に書いたものとするべきである。整理「説明」のところでは、日付の「正月九日」を旧暦と誤解し、新暦に換算したことによってもたらされた間違いである。

中国では民国時代に入ると、西洋に倣い、改暦して公暦（西暦のこと）を用いた。作者は因習的な制度を改めて新しいものに変えることをつとめて主張していたので、率先して自ら実行したはずである。これは『家信選』第二通から証拠が得られる。第二通の最初に「卅一日宜昌に到着後……」とある。旧暦は一月多くとも30日しかないの、「卅一日」は公暦に決まっている。これは作者が日本に渡航する前からすでに手紙の中で公暦を使用するようになったことを意味し、『家信選』の編注者もこの点を認めている。日本の改暦は中国より早く、1873(明治6)年に始まる。作者は日本に留学していて新暦を使うほうがより便利なはずである。家信の全部を通読すれば一つの共通点に気づく。それは作者が旧暦を使う場合は必ず「旧暦」と明確に記し、何も記さない場合はすなわち新暦だということである。新暦の一月を「正月」と称することは、『家信選』の中でまた多くの例がある。

例えば、第五通に「正月に入ったばかりで、書籍衣類・寝具家具を多少購入し……」(p. 20)とあり、この「正月」はすなわち新暦1914年1月を言うのである。

第六十通の手紙、最後から8行目に「冬休みは正月十五日に至ります」とあり、日付は「正月二日」となっている。この2カ所の「正月」はいずれも新暦1月のことを言っている（『家信選』の整理「説明」にも新暦1月と解釈されている）。日本の学校は新暦のお正月前後に冬休みがあり、期間は1ヵ月未満で、1月中旬に終わり、2月まで延ばすことはない。

民国初年、公暦1月を「正月」と記述するのは作者一人だけに止まらない。この点は第二節1913年12月25日付葉書の消印を参照していただきたい。配達地嘉定府の消印には「三

年正月十四日」があり、この「正月」はすなわち公暦の1月を指すのである。新旧暦1月の呼び方を間違えないために、後の人々は通常公暦の1月を「元月」と言い、「正月」はもっぱら旧暦の1月を指すようになったが、こうして見ると、民国初年ではこの慣例はまだ決まっていなかったようだ。

第三十五通 (p. 92)

この手紙は1916年に書いたもので、間違いはない。しかし、手紙の日付となる新旧暦の対応に誤りがある。

『家信選』の整理「説明」のなかでこの手紙の年代を特定した根拠は、民国五年の消印のある封筒となっている。しかし、手紙には「本日は新暦二月十九日で、旧暦では正月十六日に当たる」とある。『中西回史日暦』を調べれば、新暦1916年2月19日は実際旧暦の1月17日に該当する。それなら、根拠となる封筒はいったいこの手紙の封筒かどうか問題となってくる。手紙にはまた「学校は植物学の授業があります」という文句がある。そこに言う「学校」は東京一高予科か、岡山六高か、それとも九州大学かははっきりしないが、一高予科では主として日本語を学習していたし、九州大学は医科専門の課程だったのである。作者の岡山六高時代の試験科目を調べてみれば「動物植物学」という科目があり、これが手紙のなかの「植物学」と重なっているので、手紙の年代を六高時代の1915年から1918年の間に限定することができる。この3年間で1916年だけの新暦と旧暦の日に対応が手紙の日付に最も近い。封筒にはまた作者の書いた「二月十九日」という文字があるので、封筒と手紙は一致していることが判定できる。同時に次の結論をも導き出すことができる。つまり、作者が手紙のなかで記した新旧暦の日付は、第三十二通と同じく一日の誤差がある。

第四十三通 (p. 111)

この手紙は1916年1月15日に書いたものと考えられるべきである。『家信選』の整理「説明」は1917年だとしているが、誤りである。

手紙の冒頭には「今日は旧暦十二月十一日です」とあり、日付は新暦の「一月十五日」である。『中西回史日暦』を調べれば、この新旧暦の日にちの対応は1916年のはずである。もし編注者の説に従って1917年だとするなら、1月15日と対応する旧暦は「十二月二十二日」にしかならず、「十二月十一日」のはずはない。

第四十九通 (p. 126)

この手紙は1917年6月23日に書いたはずのもので、「1917年5月」ではない。

原本の手紙には日付が「廿三日」のみあって、年月はみな手紙の内容から解答を探さなければならぬ。手紙には「第二学年の試験はすでに今日で終わりました」とあり、この「第二学年」に基づいて手紙は1917年のものだと判断することには疑問がない。月に至っては、同年6月12日第四十八通を参照してよい。作者は第四十八通のなかで「学校では十八日に試験が始まり、二十三日に終わります」と、家に報告している。第四十八、四十九

通の試験終了の日に関する記述は全く同じで、いずれも23日となっていて、これは第四十九通の家信が6月のものであることを物語っている。

第五十通 (p. 128)

この手紙は1914年6月に書いたものはずで、「1917年6月」の推定は成り立たない。

指摘すべきことに、この手紙の原本にはもともと日付はなく、整理者は「説明」の中で自ら「六月二十三日」を付け加えたことによってもたらした推定の誤りである。整理注釈は、「この手紙は封筒があり、封筒の裏に『……郭開貞竹報、六月廿三日発』の字句がある」と言い、さらに消印の時間によって手紙の年代は1917年だと判断したと言っている。問題となるのは、整理者は郭沫若の家信は60余年間の月日を経て手紙と封筒が入れ違う可能性もあるという点を疎かにした。実際、手紙と封筒の入れ違いは、これらの手紙を整理する過程においてすでに気づかれたことでもあるのである。今度の入れ違いは、編集番号四十九通と五十通の封筒の間に発生し、手紙の内容に基づいて訂正すべきである。やり方としては、まず第五十通から便箋だけを取り出して時間の考証を後回しにし、第五十通の封筒を第四十九通の手紙の時間と照合してみる。これまで私どもはすでに第四十九通の時間を1917年6月23日だと推定した。この日には、第五十通封筒の消印にある1917年、および封筒の裏にある郭沫若直筆の「六月廿三日発」と、年も月も日も全く一致していて、この2点こそ元の組み合わせに違いない。

それでは、第五十通の手紙はいつ書いたのだろうか。手紙には「暑くなってきましたが、三児はさぞ汗疹を出していないでしょう」という字句がある。「三児」は郭培謙のことを指すが、「三児」、「汗疹」などの言葉から読みとれるのは、この時の郭培謙は年がまだ幼く、学業の話はまだ早いので、最も心がけるのは健康面だというイメージである。1914～1919年の家信の中から郭培謙に関する記述を摘出し、よって時間が判断できる何かの手がかりを探してみよう。郭培謙は1910年5月の生まれで、年齢は4歳から10歳までの間に該当する。

第五通 (1914年3月) : 「三児培謙も筆を取り手紙を書くことができ、……愉快極まりないです。愉快極まりないです。」

第八通 (1914年7月) : 「三児培謙はさぞ元気いっぱいだと思います。」

第二十六通 (1915年6月) : 「培謙は勉強していますか。」¹

第二十七通 (1915年7月) 「少成の勉強は進んでいますか。培謙はいい子にしていますか。」

第三十一通 (1915年9月) 「少成はこの頃勉強がうまく行っていますか。培謙は家に帰りましたか。」

第三十二通 (1915年10月) : 「培謙は勉強していますか。」

第三十六通 (1916年4月) : 「少成と培謙の勉強はどうですか。さぞ進歩は著しいことでしょう。」

第三十七通(1916年9月):「培謙は家で勉強するのが最もよいのです。この頃身長もずいぶん伸びたでしょう。」

第四十二通(1917年1月):「少成と培謙の勉強は進んでいますか。」

第四十五通(1917年2月):「少成と培謙は今年も家で勉強しますか。」

上記のように並べてみると、手紙のなかの培謙に関する話題は彼の成長に従って変わっている。1915年(郭培謙5歳)以前の話は、「筆を取」るようになり、「愉快極まりない」程度のもので、1915年以降は勉強しているかどうかを心がけるようになり、しかもその後の手紙ではほとんど毎回欠かさず勉強が進んでいるかどうかを尋ねている。それで、第五十通の時間は1915年より遅いことは考えられない。それに、この手紙には「元弟、七妹、二侄²はさぞ家に帰ったでしょう」という字句があり、夏休み中なので、弟や妹、侄たちは学校から沙湾の自宅に帰って夏休みを過ごしているだろうという意味である。この言葉は筆者に時間を判断するもう一つの手がかりを提供してくれた。元弟³は1914年に中学校を卒業したのである。卒業した当時は成都で短期間逗留したが、その後は沙湾に帰り、もう二度と勉強で当地を離れたことはない。こうして、1915年の夏なら元弟にしてはもう「家に帰った」話はない。ゆえに、この手紙は1914年の夏休みに書いたものとしか考えられない。

第五十通の冒頭に「今月中にもう二通のお手紙を家に送りました」とある。『家信選』掲載の1914年6月、7月の家信を調べてみると、7月書いたものは1通のみ、6月に書いたものは2通あり、日付はそれぞれ6日と21日になっている。あたかも「もう二通のお手紙を家に送りました」という話と一致している。さらに、1914年6月21日の手紙(p. 24)を見れば、「夏休みは近づきました。さぞ弟、妹、二姪など皆家に帰るのでしょうか」という字句があり、これは第五十通「元弟、七妹、二侄はさぞ家に帰ったでしょう」という内容とちょうど照応している。よって、第五十通の手紙は1914年6月末に書いたものと推定できる。

第五十四通(p. 138)

この手紙は1916年1月19日に書いたはずのもので、整理者が「1918年3月」としたのは間違いである。

まず、手紙の日付は「正月十九日」であり、これは新暦1月19日のはずなので、旧暦と断定する根拠はない。手紙の年代については、内容に基づいて分析する。

手紙は濟蒼弟、すなわち元弟郭翊昌に送ったものである。手紙には「日々の生活に何か楽しいことがありますか。教育に携わるほか、また時々前の課目⁴を復習していますか」という言葉があり、これは元弟の1916年初の仕事と身体状況に一致している。元弟は1915年後半から沙湾小学校校長を担当するようになり、時は半年を経て、1916年前半に至っては、体が弱く病気で校長の職を辞任し、自宅静養した。それで、この手紙は元弟が沙湾小学校で教鞭を執っていた1916年初に書いたものとしか考えられない。

手紙にはまた「『前歳』夢で登山して得た一句を思い出した。『見下ろして群山小さく、

天空に独り我のみ高し。』とある。整理「説明」は「前歳」を年代判断の一つの根拠とし、「去年」と解釈した。また、「天空に独り我のみ高し」という詩句は最初に1917年6月第四十九通の手紙に見られるのを以て、手紙の年代は1年後の1918年だと推定した。しかし、実際「前歳」は一つの漠然とした時間の概念で、「1年前」、「2年前」と解釈できるし、「数年前」とも解釈できる。作者の言葉使いの習慣から見れば、過去1年前のことを陳述する場合、「去歳」・「去年」のような表現が多く、「前歳」という言い方は見当たらない。「去歳」を例にすると、次のような箇所が挙げられる。

第三十四通：「去歳家稟，想当先此稟抵家矣。（昨年の家信はさぞこれより先に家に届いたと思います。）」（p. 89）

第三十七通：「男自去歳⁵ 五七，曾返滬一次，……（私は昨年五月七日に一度上海に帰って、……）」（p. 97）

第四十六通：「去歳曾寄相片一張，不識曾收到否？（昨年写真一枚を送りましたが、受け取りましたか。）」（p. 119）

「前歳」という表現は作者の手紙のなかで二度とは見なかったが、「前日」という表現が出ていたので、同じく3例を挙げて参考に資する。

第五通：「固男所習知者，即男前日在家時時希望高举遠徙者……（固より私も承知しております。即ち昔家において時々遠くへ行こうという希望で胸を膨らませたのですが……）」（p. 19）

第十七通：「前日浮放心氣，似較沉着。（前の浮ついた気持ちは比較的落ち着いたようです。）」（p. 48）

第五十三通：「説起七妹来，想起元弟前日来函，似乎明年有出閣之説……（七妹のことになりますと、この間の元弟の手紙を思い出します。彼女は来年嫁に行くことになった……）」（p. 136）

この3カ所の「前日」、前の2カ所は以前のある長い時期を指し、最後の1カ所はある不特定の時を言っていて、はっきりと一日前又は二日前とは言っていない。上記二つの例から考えて、「前歳」を「去年」と解釈するのが不適當だと言い切ることができる。

第五十五通（p. 140）

この手紙は1919年3月31日に書いたもののはずである。整理「説明」は年代を1918年と認定した理由は不十分である。

この手紙は日付に年代がなく、参照となる封筒、消印もないが、中身には「家のすべては和児（郭沫若の長男、和生のこと）の母親に任せっきりで、私が口を出すには及びません。和児もだんだん大きくなり、病なんか一切患いません」といった話があり、この話を和児の成長状況に関する前後数通の手紙の内容と並べて比較してみれば、その年代を推定できよう。

第五十六通（1918年5月）：「和児親子の写真を一枚同封します。子供が満七十日の時に

取ったものです。名前は和生と言ひ、大兄開文さんが命名したものです。温和吉祥の意を取り、また日本に生まれたので、二重の意味を含ませております。子供は去年新暦十二月十二日午後十時に生まれたので、今はちょうど半歳になろうとしています。大きく成長しまんまる太っていて、とても可愛いです。」

第五十八通(1918年8月):「和児はもう歯が生えました。二本の下歯で、雪のように白いです。」「時には抱いて松原を散歩すると、胸の中で静かに眠って帰ります。夜はあまり安眠できません。一晩に三、四回も目が覚めます。」

第六十通(1919年1月):「和児はとても元気で、昨年十二月十二日にもう満一歳になりました。まだ歩けませんが、非常に腕白です。去年の誕生日に写真を送りましたが、さぞ家に届いたと思います。」

第六十一通(1919年11月):「和児は最近とても煩わしいです。毎日食べる、どるだけで、一言もしゃべることができません。あと一月経てば満二歳になりますのに。」

以上のように並べてみると、第五十五通の時間は1918年5月以降のはずである。理由は簡単である。必ず先に1918年5月の手紙があり、和児出生の日にち、名前の由来、および「和児の母親はもともと日本の士族で、四年前に高等女学校を卒業し、今年二十二歳です」などを家に報告してから、はじめて後の手紙の中で徐々に「家のすべては和児の母親に任せっきり」、「和児もだんだん大きくなり」ましたというような話になるのが常識だからである。それで、第五十五通の年代は1919年3月であるべきである。

第五十七通 (p. 146)

この手紙は1919年7月2日に書いたもので、1918年ではない。

『家信選』保存版の「編后(二)」は、日本の学者名和悦子博士が唐明中氏に送った手紙を引用し、同手紙の年代について分析検討を行った。名和氏の手紙の訳文は次の通りである。

この手紙は1918年7月に書いたのではなく、1919年7月に書いたのです。証拠としては次の4点が挙げられます。

1. 「学校自前月十八日⁶ 放假後(学校が先月18日より夏休みに入ってから)」

この手紙はもし7月2日に書いたのなら、先月18日はすなわち6月18日に休みが始まったこととなります。しかし、当時の岡山の新報『山陽新報』によれば、1918年第六高等学校は7月3日に卒業式を行いました。新聞に掲載された卒業生氏名のなか、第三部二十二番に「郭開貞」の名前を見ることができます。それで、6月18日の学校はまだ授業中だと考えられます。

2. 「男毎日便往病理教室実習……(私は毎日病理教室へ実習に行っています……)」

『第六高等学校一覽』によれば、大正⁷6~7年(1917~1918年)第三学年第三部の教科書一覽表には「病理教室」という課目の実習が見られません。「物理実験」と「化学実験」があります。日本で「病理」と言えば、一般的に大学の医学部で学習する内容です。そこで、「病理教室」は九州大学医学部で学ぶときの部局と考えられます。

3. 「日本近来米価亦非常昂貴……(日本も近年米価が非常に高騰し……)」

『桜花書簡』の「説明」は、「米騒動は1918年だ」と指摘していますが、実際日本で「米騒動」は1918年7月下旬から9月下旬までの間に発生したのです。岡山『山陽新報』によれば、1918年8月13日に騒動が発生し、翌日第十七師団が出動して鎮圧しました。よって、7月2日にはまだ米騒動が発生していないと考えてよいと思われます。また、『東朝』という新聞の1919年6月25日付の関連記事によりますと、当時の日本経済はとて不安定ですので、米価も常に不安定でした。

4. 「東京各小学教員数千人、同盟協約、要求添薪十分之八、如不増薪、便全体不上講堂(東京各小学校の教員数千人が同盟して協議し、給与の八割増を要求しました。もし増給がなければ、全員授業をしないと主張しました。)」

この点に関して国会図書館に問い合わせたところ、1918年ではなく、1919年6月29日に発生した事件だそうです。

名和悦子氏は関連事実について詳細な調査を行ったので、手紙は1919年7月2日に書いたものに間違いはない。手紙の中にはまた「毎日往院中去治療耳疾(毎日病院へ耳炎の治療に行っています)」とあり、ここにいう「院」は、九州大学附属病院のことを指し、この附属病院は一般社会人の診療も受け入れている病院である。

第五十九通 (p. 152)

この手紙は1914年11月27日に書いたもので、整理「説明」が年代を1918年と指定したことには根拠が不十分である。

この手紙を読むとき、言葉の表現が文語に偏り、作者が日本に留学していた初期の文体に近いことに気づく。手紙の後半は元弟が学業を続けるべきかどうかをめぐって話題が展開している。手紙の内容から、進学すべきかどうか、職に就くならどんな職に就くかという、元弟の中学卒業前後における気持ちの動揺が読み取れるので、時間は元弟が中学校を卒業した1914年の年のはずである。元弟の気持ちの変化に関する記述が手紙の全体を貫いている。例えば、1913年冬、作者がまだ北京にいたとき、元弟は工学を学ぶ気があり、作者に対しても「実業を勧めた」のだが、1914年6月、中学校卒業直前に、元弟がまた「志を教育に改める傾向が出て」、手紙を寄越して北京師範学校の状況を教えて欲しいと言ってきた。さらに、1914年秋また「家の事は人手が要り、肉親が世界各地に四散している」などを理由に、完全に継続して進学する夢をあきらめ、成都から沙湾に帰った。一年間もしないうちに、元弟は自らの進路について数回も考えを変更し、「勇退の気持ちも何と甚だしいだろう」と、作者を大いに嘆かせたのである。もし手紙が1918年に書いたものならば、元弟が卒業後4年間の長い間に、たとえ学業、将来についての考えが何か変化があるにしても、恐らくこれほど作者を心配させることはないであろう。また、われわれは第五十五、第五十七通の年代に関する検討の中ですでにわかったように、作者は1919年3月の手紙の中で親に「鹿葦さんは九月中にまだ来るはずです。来るときには、元弟に宗仁・

宗益、侄の張をも連れて同行させ、留学に来させるほうがよろしいと思います」と言っており、1919年7月にはさらに「元弟を鹿萃兄に付いて留学に来させる」よう催促している。もしこの手紙が1918年末に書いたものならば、郭沫若はこの時すでに「家の人の気持ちを尊重し」、「自分の主張を諦め」、その後も元弟を日本へ留学に来させることを堅持しなくなった、という点も成り立たなくなる。

こうして、手紙の年代を1914年と断定するのはちょっと乱暴ではないかと思われるかも知れない。それでは、この手紙の筆跡と使った便箋を見てみよう。『家信選』保存版に影印された直筆の原本を見れば、この手紙は1914年夏から秋に至る間に書かれた第十、十一、十六、十七通に使った便箋と筆跡が極めて似ていることに気づく。とくに注目すべきなのは、第十七通の日付、「十一月廿七日」である。この日付は第五十九通の日付と全く同じで、いずれも「十一月廿七日」だということである。総合的な判断を経て、一つの面白い答案が浮かび上がってくる。つまり、第十七通と第五十七通はもともと同じ封筒に入った2通の手紙で、前者は両親宛に書いたもので、後者は元弟宛に書いたものということである。2通は1914年11月27日という同じ日に書かれ、封筒の紛失によって2通は別々になった。2通の手紙が同じ封筒に入れられるのは、この一例に止まらない。1914年9月29日付の第十二通と第十三通を見ればわかる。1通は従兄「少儀三兄」宛に書いたもので、1通は両親宛のものである。2通は同じ封筒を使っていて、封筒はまだ残っているの、いい証左となる。ただ、『家信選』の整理「説明」はこの2通の手紙が同一の封筒を使った事実を明らかにしておらず、第十二通を残った封筒と組み合わせ、第十三通を「封筒なし」に止まったのである。

ついでに、第十二、第十三通の配列順序についても検討してみる。手紙は郭鳴興達号宛に郵送したもので、両親宛のものを少儀三兄宛の手紙の前に入れたほうがより妥当と考えられる。1914年9月中に、郭翊昌はまだ完全に学業を終えて沙湾に帰っておらず、その間郭少儀が両親に代わって返事の執筆を担当していた。当時の状況は本稿(二)「補遺」に紹介する1913年末の葉書から裏付けを見つけることができる。

第六十二通 (p. 162)

整理「説明」はこの手紙の年代を1920年だとしていて、これは間違いない。書いた日には1920年3月4日のはずである。

この手紙の日付は「陰曆正月二十五日」となっている。『中西回史日曆』によれば、この日と対応する新曆は1920年3月4日である。この手紙は郭博が新曆1920年3月4日、旧曆1月25日の生まれであるということを正確に記録している。これによって、第六十四通の手紙で言及した「三月十五日」は記憶上か計算上の誤りである。

第六十六通 (p. 176)

この手紙は1923年1月21日に書いたはずのものである。「説明」は22日と間違えているので、訂正すべきである。

作者は復生の生まれた年について二つの記述を残している。『創造十年』は1923年初と記し、『五十年簡譜』は1922年と記している。どちらが正しいのだろうか。手紙の中には2カ所の日にちの記録が残っている。冒頭の「今日は全月五日（旧暦12月5日のこと）」と、直筆の日付「新曆正月廿一日」である。『中西回史日曆』をみれば、この年は1923年のはずである。この手紙は郭復生の生年月日が1923年1月21日であるということを証明する確固たる証拠であり、『五十年簡譜』の勘校に十分な理由を提供した。

整理「説明」には『創造十年』に基づいて手紙の年を1923年だとしたことは正しいが、日付の直筆「廿一日」を「二十二日」と誤って説明したので、ここに訂正しておく⁸。

(二) 家信補遺、及び郭沫若が離京し日本に渡航した日時に関する考証

『桜花書簡』のサブタイトルは「郭沫若一九一三年至一九二三年家信選」である。この最後の一文字「選」は、郭沫若の日本留学時代の家信についての更なる整理と新たな発見によって、郭の若い時代の研究に関する史料上の盲点を減らすことへの人々の期待を十分醸成することができる。留学時代の家信についての更なる整理と言え、郭沫若が1913年末に北京で両親宛に書いた手紙は抜かされるべきではない。これは一枚の葉書である。その写真は1992年文物出版社刊行の図画写真集『転変中的近代中国・郭沫若』に納められ、編集番号は第14図である。この図は郭沫若記念館が行った展示会にも採用されたことがあるが、葉書の内容全文が郭沫若作品集や研究誌に公表されることがないため、人々は捜しにくいし、印象も浅い。

次はこの葉書の由来についてである。『家信選』の編注者の一人である唐明中氏の説明によれば、およそ1965年頃から、楽山文化館が郭沫若の関係史料の収集に着手するようになり、文化館の責任者である黄高斌が沙湾郭鳴興達号旧宅で多くの文物史料を集めた。なかには郭沫若が若いときの成績表、宿題ノート、および各時期の家信が含まれていた。(1982年、郭沫若記念館が短期間の展示会を行うとき、楽山文管所から一部の文物を借用し中国革命博物館に届けて複製を依頼したが、点検を経て、なかには郭開文が臨書した筆跡も入っていることがわかった。)黄高斌が追憶の文章の中で、1965年6月に上京して郭沫若を訪れ、文化館のことを支持し、館名を揮毫してくれるよう頼んだと書いている。その後また人を頼んで、沙湾の旧宅から得た資料を数種類選び、北京に持ってきて郭沫若に送った。郭沫若と于立群が北京より自ら満足できる程度の書道作品と、古い写真のために書いた説明文を送り返し、これで、故郷文化館の方々の望みが実現した。

郭沫若と于立群がなくなってから、お二人の貴重な書はかつて楽山凌雲寺藏経楼に掛けられ、1979年に楽山で開催された郭沫若学術研究会に参加した方々は皆目の保養になるチャンスがあったと思う。これと同時に、楽山文管所は旧宅から集めた郭沫若の若い時の資料に対する整理を始めた。郭沫若の1913年の葉書は、早くも前世紀の60年代に北京に届けられたため、『家信選』に収録されなかった。

葉書は200字を超えないものだが、郭沫若の生涯における重要な転換点の証である。正にこの時、郭沫若の長兄郭開文が有り金をはたき、半年の学習生活を維持できる費用を出して、翌日郭沫若を日本留学への途に就かせたのである。それにより、茫然と救国の途を捜していた郭沫若は、日本に渡航する決意をし、退路のない奮戦に直面することになった。葉書にある内容をここに紹介し、郭沫若の1913年から1923年までの家信選の補遺とする。なお、原文は句読点がなかった。

四川嘉定府城内県街洪昌店気付 乞うついでに沙湾に届けてくれる人を見つけて下さい。

郭鳴興達宛

私在家を離れてから半年になりました。四川から北京まで交通が不便で、道程数千里もあります。お正月はもう近いですが、白鳥に随い風に乗って家へ帰ることができないのは残念です。京師の学風は極めて乱れていて、酒色に溺れ、歌い騒いで、青年子弟は最も墮落しやすいです。長兄は私を日本へ渡航させようと決意し、明日張次瑜君と一緒に京奉鉄道の夜行に乗り、南満州・朝鮮経由で日本に赴くことがすでに決まっています。十日間の旅でたいしたことではないので、どうかご心配なさらないで下さい。

三兄のお手紙は天津から転送されてきて、もう読みました。

乞うご福安!

皆様によろしく。

開貞跪拝

陰曆十一月廿八日夜記す

葉書には4個の消印があり、うち、差出地の北京は2個、日付はいずれも「二年十二月二十六日」、民国の紀年を用いたので、すなわち1913年12月26日である。転送地の重慶に1個、英語を使用したもので、時間の配列順序は日/月/年となっている。消印には「□. JAN. 14」とあり、すなわち【19】14年1月某日のこと、日にちははっきりしないため判読できない。配達地の嘉定府に1個、時間は「三年正月十四日」、すなわち1914年1月14日である。『中西回史日曆』を見ると、日付の「陰曆十一月廿八日」は新曆の1913年12月25日である。差出地の北京の消印と付き合わせて時間的につながっているため、日付の日にちは間違いないと考えられる。葉書には、「長兄は私を日本へ渡航させようと決意し、明日張次瑜君と一緒に京奉鉄道の夜行に乗り、南満州・朝鮮経由で日本に赴くことがすでに決まっています。」とあるので、作者が北京から出発し、日本留学への途についた日は1913年12月26日夜だという結論が得られる。

この日にちについて、作者は他の作品で異なる記述を残している。『我的学生時代』は12月30日「私は三十日に北京を離れました。……朝鮮の釜山で一九一四年の新年を迎えたのです」⁹、『初出夔門』は12月28日「……道順は京奉鉄道を利用し朝鮮経由だったので、二十八日夜約束の時間に北京駅で待ち合わせることにした。」¹⁰と記している。前者は間違っ

て記したに違いない。鉄道を利用して、12月30日に北京を發ち、翌年1月1日に釜山に到着するのは、これは当時においてはどうしても不可能である。後者には詳細な記録があるが、何と言っても1935年に書いたもので、20数年前に発生したことへの追憶だから、もし当時作者がこの葉書を見ていたならば、きっとより正確な追憶の文章が書けたであろう。この葉書と、『初出夔門・樂園外的林檎』に基づいて、郭沫若が北京を發ち朝鮮に赴く際の行程を再現することができる。

26日 夜、北京を發ち、京奉鉄道の列車に乗って東へ向かう。

27日 早朝山海関を通り過ぎ、当日の夜奉天（今の沈陽）に到着。一軒の日本人が経営している旅館に宿泊。

28日 早朝奉天から安奉鉄道の乗り換え、夜安東に到着。税関で手続きを終えてから、さらに乗り換えて朝鮮国内に入る。

29日 朝列車は朝鮮の元首都である漢城を經由して、夜釜山に到着。

1913年の列車時刻表が見つからない現在、郭沫若が釜山に到着した時間を12月29日の夜だと、おおざっぱに推定するしかない。列車到着の時刻はすでに夜12時を過ぎ、カレンダーは30日にめくったという可能性も否定できない。

（三）郭翊昌と郭沫若の若い時代の文献資料

郭沫若の若い時代の文献資料が樂山文化館に徴収されてから1年後、10年間の文化大革命の災禍に出くわした。幸いなことに、これらの資料は動乱を経ても完全に保存されてきて、郭沫若が亡くなってからまもなく、学界において続けて『郭沫若少年詩稿』と『家信選』のような貴重な史料価値をもつ文集が発表された。これは樂山文管所の方々の職業操守に感謝しなければならない。さもなければ、『郭沫若少年詩稿』と『家信選』が世間に姿を見せることはなかったであろう。『郭沫若少年詩稿』と『家信選』の編者が「編後」の部分で、2書の出版に関心を寄せ、支持・協力してくれたすべての人々に感謝の意を表し、郭沫若の親族である張琮華・郭宗璿・吳鹿華・魏蓉芳、および郭沫若の同窓友人を挙げた。今度の閲覽と訪問を通じて、忘れてはならないもう一人の存在に気づいた。すなわち、郭開運（1895～1971）、字は翊昌という人物である。郭沫若は彼を「元弟」と呼び、郭家四兄弟のなかで四番目に連ねるので、伯仲叔季の並べ順にしたがって、また彼を「季弟」とも称した。

これまで整理された郭沫若留学時代の家信は合計67通で、そのうち、両親宛59通、両親および元弟郭翊昌宛1通、元弟郭翊昌宛5通、5番目の兄郭翊新宛1通、三番目の兄郭少儀宛1通である。郭沫若の家信から読み取れるように、元弟郭翊昌が中学校を卒業して沙湾に戻ってから、だんだん親の身の回りの頼りとなり、来信があれば彼が読み聞かせ、返事の際も彼が代筆していた。たとえ両親宛に差し出した手紙の中でも、元弟への話しかけはところどころに見られる。元弟が故郷を離れる人のノスタルジアの気持ちを理解せず返

事が遅くて詳しくないことをとがめるとか、時間を作って杜家場へ行って母方の祖先の墓参りをしてきて欲しいとか、父親に付き合って峨眉山に登り遠くを眺めて来ることを勧めるとか、元弟が折よく父親の教訓を抄録することを賞賛するとか、元弟に詩歌創作の感想を教え共に検討するとか、時には無意識に両親に差し出す手紙と元弟宛に書いた内容を一緒に連ねるなど、1915年4月12日付の手紙は一つの典型的な例である。そのみならず、郭沫若の最初の妻張琼華夫人への連絡も元弟によって伝えられたのである。

郭翊昌の未亡人魏鳳英の証言によると、樂山文化館が沙湾郭鳴興達号旧宅へ郭沫若の若いときの資料を持っていったまでは、郭翊昌がこれらの資料を守る最後の人であった。2005年夏、筆者が中共沙湾区委宣传部、沙湾区文化局の責任者と一緒にご高齢の魏鳳英氏を訪ねた。魏鳳英の紹介によれば、張琼華夫人は1963年以前、侄たちに随って樂山県城内に移住したのである。郭翊昌夫妻はその後もずっと沙湾郭鳴興達の古い家に住んでいた。文化館の責任者が沙湾へ郭翊昌を訪ねに来たとき、樂山県城から張琼華にも同行してもらった。その時郭沫若の5番目の兄郭翊新はすでになくなっていて、文化館の方々が沙湾の旧宅から資料を持っていった当日、魏鳳英は家にいなかった。事後、郭翊昌からこの日すでに文化館に必要なものをすべて渡したことを聞いた。魏鳳英は無口な方である。しかし、郭翊昌のような、知識と教養があり、書画にも長じるベテランの漢方医にとって、文化館に送ったそれらの柔らかくて古くさい紙切れに、老人のどんな気持ちが滲んでいたのであろう。

郭沫若は生涯国家民族の再興を自らの務めとし、至るところをすみかとしてきたが、両親・兄弟姉妹への愛情は終始少なくなることはなかった。彼は作品のなかで何回も長兄郭開文への感謝の念を表し、長兄こそ少年時代の郭沫若に資本主義文明の啓蒙をもたらし、また彼を日本留学に送り出し、「海闊凭魚躍、天高任鳥飛（海広く魚は思う存分に泳ぎ、天高く鳥は思いっきり飛ぶ）」のような自由に活躍できる世界へと歩ませたのである。周知の随筆『芭蕉花』のなかで、郭沫若は、病中の慈愛深き母のために、自分を連れて天後宮から芭蕉の花を盗んできたことで親にひどく叱られた次兄郭開佐（翊新。大家族内での序列に従って「五哥」とも呼ぶ）の面影を、永遠にあの最愛の肉親の画面に残した。もし郭沫若の詩文に出る頻度を比較してみれば、郭開運（翊昌）がもしかしたら数人兄弟のなかで出る頻度の最も多い人かもしれない。『郭沫若書法集』には、1939年弟の翊昌さんの頼みに応じて書き記した次のような心の奥底から発する言葉がある。

人知好利之害，而不知好名之害為尤甚。所以不知者，利之害粗而易見，名之害細而難知也。故稍知自好者，便能輕利。至于名，非大賢大智不能免也。思立名，則故為詭異之行；思保名，則曲為遮掩之計。終身役役于名之不暇，而暇治心身乎。昔一老宿言，拳世無有不好名者，因發長嘆。坐中一人曰：不好名者唯公一人而已。老宿大悅，不知已為所賣。名関之難破如是¹¹。（人間は利益を貪ることの弊害を理解しているが、名誉を貪ることの弊害が最も甚だしいことをわかっていない。わからない所以は、私利の弊害は簡明でわかりやすく、名誉を貪ることの弊害は把握しにくく難解である。故に

少しでも自分を大事にすることを知っている人は、利益を軽んじることができる。名誉に至っては、大賢で大智でなければその誘惑から免れることはできない。名を立てようと思ったら、奇異な行動を起こさなくてはならない。名誉を保とうと思ったら、間接的に隠蔽工作を行わなければならない。一生涯名誉のために苦心することもままならないのに、心身を治める余裕などあろうか。昔ある老人は、「世の中に名誉を好まない者はいない」と言って、深く嘆いた。座中の一人が言ったことには、「名誉を好まない者はあなた様一人だけです」と。老人は非常に喜んだが、相手にしてやられたことに気づかなかった。このように名誉という関門は突破しがたいのである。）

『潮汐集』には同年9月作の「さらば季弟」という歌がある。国難の最中、また父親を亡くした傷みに耐え、郭沫若は、東漢の史学家班固と、軍事・外交の名将班超二兄弟の報国の実例を以て、次のように弟と励まし合った¹²。

少時憂戚最相関、	年若いとき憂愁を最も分かち合い、
卅載睽違幸活還。	三十年間も離ればなれになって幸運にも生還した。
二老俱帰同抱恨、	両親共に帰らぬ人となったことを相悲しみ、
四郊多壘敢偷閑？	敵陣が周りを囲むなかどうして長居できようか。
飄揺日夕惊風雨、	夕暮れ時に彷徨っていると雨風に驚き、
破碎乾坤剩蜀山。	祖国は破れ、蜀山をのこすのみ。
自分已將身許国、	私は既に己の身を祖国に捧げようと決心したので、
各傾余力学双班。	おまえも私も余力を「双班」に学ぶことに傾けよう。

『郭沫若題画詩存』には、1943年12月郭沫若の、翊昌弟が書いた「秋葵」・「古松」という二幅の絵のために揮毫した詩がある。幼少時の思い出、故郷への思いが紙上に躍如としている¹³。

……

幼時亦能画，至今手犹痒。	幼少の時も絵画ができたが、今なお腕がむずむずしてくる。
欲得芥子園，恢復吾伎倆。	芥子園を手に入れて、私の技術を取り戻したい。

……

珊瑚交枝柯，人生同野馬。	珊瑚に枝柯が交叉し、人生は野生の馬のようだ。
我思峨眉山，安能至其下。	私は峨眉山へと思うが、どうしてその下に至ることができようか。

関連の字句をすべて抄録するまでもなく、郭沫若と郭翊昌との兄弟愛はさらさら流れる小川のように、年を経ても冷めることはなかったことが窺える。長兄郭澄塢の「集聯」¹⁴を借りていえば、まさに「清謡結心曲，真想在襟里（素朴な民謡が心に響き、家族への思いを心の奥に大事にしまっておきたい）」¹⁵である。建国後、郭翊昌が独学で身につけた医道を以て、沙湾中医医院で尊敬される医者の一となり、自ら人命を助け、負傷の人を治すことを自分の務めとし、名利を遠ざけ、淡泊で自我を見失わなかった。彼と郭沫若との手紙のやりとりは1969年5月まで続いた。この時、郭翊昌はすでに80歳に近かった。2年後、

年取って漢方医が沙湾でなくなり、享年76歳だった。

本稿では郭沫若の兄弟愛について議論を展開するつもりはない。ただ、郭沫若の若い時代の文献資料を閲覧・使用する際、かつてその保存・保護に心血を注いだ多くの先人たちの名を心に銘じると共に、彼らのなかにはまた郭翊昌という人物もいたことを忘れないでほしい。

附 表 1

郭沫若の日本留学時代の家信は、時間の考証と補遺を通じて計67通なのがあり、その

郭沫若1913～1923年家信一覧表

年	月日	元順番	形 式	差出地 (□は筆者が訂正補足したもの)	受 取 人
1913年 【4通】	10.17	1	手紙	渝城	両親
	11. 3	2	葉書	【漢口】	両親
	11. 6	3	手紙	天津	両親
	12.25	増補	葉書	【北京】	両親
1914年 【18通】	2.12	4	手紙	日本東京小石川大塚戸村方	両親
	3.14	5	手紙／封筒なし	【東京】	両親
	6. 6	6	手紙／封筒なし	【東京】	両親
	6.21	7	手紙／封筒なし	【東京】	両親
	6.末	50	手紙／封筒なし	【東京】	両親
	7.28	8	手紙／封筒なし	【房州】「来信は前と同様に東京へ送って下さい」	両親
	同上	8*	添え書き便箋	【房州】「返事は前と同様に東京へ送って下さい」	両親
	8. 1	9	手紙	【房州】八月一日、日本寄り	両親
	8.29	10	手紙	日本房州	両親
	9. 6	11	手紙／封筒なし	【東京】	両親
	9.29	13	2通は同一の封筒	日本東京小石川大塚窪町二四戸村方	両親
	同上	12			郭少儀(三番目の兄)
	10.22	14	葉書	【東京】 「住所本郷区真砂町二五番地修園」	成都西府街警備隊員養成所郭翊新(五番目の兄)
	10.28	15	葉書	日本東京本郷区真砂町二五修園	両親
	11.16	16	手紙／封筒なし	【東京】	両親
	11.27	17	2通は同一の封筒／封筒なし	【東京】	両親
	同上	59			郭翊昌(濟蒼弟)
	12. 2	18	手紙／封筒なし	【東京】	両親
12.24	19	手紙	日本東京本郷区真砂町二十五番地修園	両親	

1915年 【14通】	3. 3	20	手紙	日本東京本郷真砂町二十五番地修園	両親
	3.17	21	手紙	日本東京本郷区真砂町二十五番地修園	両親
	4.12	22	手紙／封筒なし	【東京】	両親、郭翊昌(元弟)
	5. 5	23	手紙	【東京】	両親
	5月の 中下旬	24	手紙／封筒なし	(住所は本郷区追分町三十一番地富喜館、……ただ一ヶ月の仮住まいとするのみ)「家からのお手紙は『本郷元町二丁目友助方李樹璉処』宛に送り、転送してもらおうほうがよい。」	両親
	6. 1	25	手紙 第一号	日本東京本郷区追分町卅一番地富喜館	両親
	6.25	26	手紙	日本東京第一高等部寄り 「家からのお手紙は東京本郷元町二丁目四七李樹漣君に転送してもらおうほうがよい。」	両親
	7. 1	27	手紙／封筒なし	【東京】	両親
	7. 5	28	手紙 第三号	日本東京本郷区菊坂町九四番地中華学舎寄り	郭翊昌(元弟) 附「我之自愛説」
	7.20	29	手紙 第四号	日本東京本郷区菊坂町九四番地中華学舎部寄り	両親
	同上	30	手紙	日本東京本郷区菊坂町九四番地中華学会【舎】部緘	郭翊昌(季昌弟)
	9. 7	31	手紙	日本岡山市国富二九四 平廬	両親
	10.21	32	手紙 第八号	日本岡山市国富一〇六小川春方	両親
12.10	33	手紙／封筒なし	【岡山】	両親	
1916年 【10通】	1. 9	34	手紙／封筒なし 第一号	【岡山】	両親
	1.15	43	手紙／封筒なし	【岡山】	両親
	1.19	54	手紙／封筒なし	【岡山】	郭翊昌(濟蒼弟)
	2.19	35	手紙	日本岡山第六高等学校	両親
	4.30	36	手紙	日本岡山第六高寄り(現住所、岡山市内、内山外九三適廬)	両親
	9.16	37	手紙／封筒なし	【岡山】	両親
	10.14	38	葉書	日本岡山第六高等学校寄り	両親
	11.19	39	手紙／封筒なし	【岡山】	両親
	12.23	40	葉書	【岡山】	両親
	12.27	41	手紙／封筒なし	【岡山】	両親

1917年 【10通】	1. 12	42	手紙／封筒なし	【岡山】	両親
	1. 19	44	手紙／封筒なし	【岡山】	両親
	2. 24	45	手紙／封筒なし	【岡山】	両親
	4. 11	46	手紙	日本岡山第六高等学校	両親
	5. 4	47	葉書	日本岡山市第六高等学校	両親
	6. 12	48	葉書	日本岡山市弓町八十一番地	郭翊昌（済蒼弟）
	6. 23	49	手紙／封筒なし	岡山市弓の町八十一番地柘植方	両親
	7. 16	51	手紙／封筒なし	【岡山】	両親
	8. 14	52	手紙／封筒なし	【岡山】	両親
	11. 7	53	手紙	日本岡山市第六高等学校	両親
1918年 【2通】	5. 25	56	手紙／封筒なし	【岡山】	両親
	8. 24	58	手紙／封筒なし 第二号	【岡山】	両親
1919年 【4通】	1. 2	60	手紙／封筒なし	【福岡】	両親
	3. 31	55	手紙／封筒なし	【福岡】	両親
	7. 2	57	手紙／封筒なし	【福岡】	両親
	11. 9	61	手紙／封筒なし	【福岡】	両親
1920年 【1通】	3. 4	62	手紙／封筒なし	【福岡】	両親
1921年 【1通】	12. 25	63	手紙／封筒なし	【福岡】	両親
1922年 【1通】	1. 11	64	手紙	竹根灘	両親
1923年 【2通】	1. 17	65	手紙／封筒なし	【福岡】	両親
	1. 22	66	手紙／封筒なし	【福岡】	両親

附 表 2

『家信選』本文正誤表

頁	行	鉛印本本文	手紙の直筆	説 明
p. 33	12	鳧水	浮水	
p. 42	下より 1	廿八日	二十八日	「廿」と「二十」は意味の違いがないが、本文は手紙の直筆に忠実にすべきである。
p. 45	4～5	児女情態	女兒情態	
	10	使大哥知者	使大哥知此	
	14～15	之科学	科学	本文に1文字の誤植がある。
p. 48	下より 3	二十七日	廿七日	

p. 50	3	焼暖炉→(STOVE)	焼暖炉(STOVE)	本文に→の誤植がある。
p. 60	12	棉帽子	綿帽子	
	12~13	実成吾国	実威吾国	
p. 65	下より3	依人数循環	依八数循環	
p. 66	1	為要也	為妥也	
p. 70	下より6	李樹璉	李樹漣	
p. 74	3~4	【略】	昨夜接読弟夏節(夏節為何意思?)前四日一函,甚為漸聳。前次帰滬…	前後文脈が通るようにし、段落を改める必要はない。
p. 78	下より4	中華学舎部寄	中華学舎寄	本文に1文字の誤植がある。
p. 79	下より3	Ueematurm	Ultimatum	
p. 82	5	毎月間不上…	毎月間不上…	
	6	由東京来此,此次因	由東京来此,因	本文に2文字の誤植がある。
p. 87	4	正有憂容	甚有憂容	
p. 92	9	木質	本質	
p. 97	2	自歳五七	自去歳五七	
p. 102	8	無病息笑	無病息災	
p. 104	3	持久,望元弟…	要持久,尚以此致望元弟, …	本文には4文字が脱落した。
	下より1	二十三日	廿三日	
p. 113	下より9	生理	生易	「生易」は商売の意。「易」は交換の意で、例えば「交易」「貿易」。
p. 114	2	頗云親熱	頗亦親熱	
p. 122	2~4	家中有《困学紀聞》一書,請元弟将其中関于庄子一部分抄示我為望。	(同左)	この文は追伸の言葉であり、手紙の署名と日付の次に並べるべきである。
p. 124	下より5	岡山市云町八十一番地	岡山市弓町八十一番地	「弓町」は、明治28年(1895)の岡山地図で「弓ノ丁」であり、大正7年(1918)の岡山地図で「弓之町」となっていて、今と同じ名前である。
p. 128	下より1	六月二十三日		直筆の手紙には日付がない。本文は間違いである。
p. 129	1~2	岡山市弓少町八十一番地	岡山市弓の町八十一番地	保存版は封筒の写真を収録していない。訂正はp.124下から5行目に依拠する。『家信選』の本文は殆ど日本語平仮名の「の」を漢字の「少」と間違えている。
p. 135	7~8	HaeceR	Haller	

	11	Kentigenn	Kentigern	
	14	THomas 。 Pann	Thomas Parr	
p. 138	2	旧筆	旧業	
p. 140	下より5	宗仁、宗益	宗仁、益	本文に1文字の誤植がある。
p. 149	下より7	海岸山有	海岸上有	
p. 152	4	得一証矣	得一証□	□は識別不可能。本文が「矣」とするには疑問がある。
	7	学習緝熙	学有緝熙	
	下より7	弟亦有函矣	弟亦有函□	□は識別不可能なので、本文が「矣」とするには疑問がある。
	下より1	二十七日	廿七日	
p. 159	9	很完備	狠完備	
	10~11	很可以	狠可以	
p. 160	2	離家很近	離家狠近	
	10	北魏書，書中有倭寇志一篇	北魏書，書中有倭寇志一篇	篇名の下に傍点がある。
	13	元兵徵日本的紀事	元兵徵日本的紀事	
p. 162	2	双喜重重	双囍重重	
	4~5	【略】	安娜已于今晚（午後六時三十分頃）分娩，又得一男……	前後文脈が通るようにすべきである。
p. 165	下より9~8	如象照相	如像照相	
	下より8~7	如象画画	如像画画	
	下より5	howogvm himony	homogeni , harmony	純粹で和やかな意。 Homogeni は homogeny の誤りであろう。
p. 166	下より7	【略】	好了！萼朶兒露了頭角了！（我が故郷では「萼蕾」を「格都」という。萼朶の音便と考えられる。） 一攢，兩攢…… 攢攢的的萼朶兒都解了苞了。	前後文脈が通じるようにし、注[8]を削除するべきである。
p. 167	5~8	【略】	末後兩句非常之神妙。因為一方面包含了一種甚深刻的象徵。 這兩句最好，最有力量！ 如此便够了，以下數句是蛇足。	直筆の最後の一段落は書き方が乱れていて、行間に2カ所の書き足しがある。前後の文脈が通るようにし、注[8]を削除するべきである。

p. 171	下より6	難以指辦	難以措辦	
p. 174	2	【略】	今天受了第五部（耳科、眼科、皮膚科）的試驗。及第了。	直筆の行間に1カ所の書き足しがあり、前後文脈が通じるようにするべきである。
p. 176	下より1	二十二日	廿一日	

並べ順は次の表の通りに調整すべきである。

『家信選』保存版の「釈文」は繁体字を使用し、鉛印本のそれと比べて筆跡識別の間違いと誤植がそれぞれに増減があるが、大した差はない。保存版は印刷数が少なく、研究者が使用しているのは殆ど鉛印本であるため、上表は鉛印本のページ数に照らして訂正を進めた。句読点に関して、使用方法においてある程度の容認範囲があり、また個人によって使用習慣の差もあるので、意味理解の違いを来すには至らない。そこで、正誤表は句読点に及ぼさなかった。チャンスがあれば全体に関する新たな整理を期待する。ここに断っておきたいことは、筆者の学識、および保存版の撮影と製版の明瞭さの不十分で、一部の字に関する筆跡識別はやはり十分な自信がなく、何かの間違いや手落ちがあれば、さらなる検討を期待したい。

注

- 1) 原注：子供さんの追憶によると、郭培謙は5歳の時に勉強を始めた。手紙の内容と一致している。
- 2) 訳者注：大高本は「二人の姪」と訳されている。中国では兄弟の息子を「侄」と言い、娘を「姪」と言う。
- 3) 訳者注：郭沫若の実弟。名前は郭開運、字は翊昌。郭沫若は手紙のなかで「元弟」と呼び、郭家四兄弟のなかで四番目に連ねるので、伯仲叔季の序列で「季弟」とも称し、濟蒼弟と称するところもあった。
- 4) 原注：原文は旧業。『家信選』は「旧筆」と誤って説明している。
- 5) 原注：『家信選』は『去歳』を『歳』と誤って説明している。
- 6) 原注：1981年の『家信選』は「自前月十八日」を「目前十八日」と間違えている。
- 7) 原注：本文は「大正」を「大至」と間違えている。
- 8) 著者附記：上記の考証訂正がまだ最後に完成する前に、蔡震の新作『文化越境的行旅 郭沫若在日本二十年』が刊行された。この本には「『桜花書簡』の正誤について」という附録があり、郭沫若の9通の家信の時間について新たな判定を行い、理にかなっている。普通に考えるなら、正確な解答があった以上、ここに述べた12条の考証訂正は全部省略し、結論の同じ部分、すなわち第三十四、四十三、四十九、五十、五十四、五十五、五十七通についての検討をカットしてよいと思われるかもしれない。しかし、考証推定の方法が同じだというわけではないため、解題の際、異なる計算方法で解答の是非を検証することができ、より説得力があると考えられる。よって、この7通の手紙に関する議論をも残すことにした。

- 9) 原注：『郭沫若全集・文学編』第12卷14頁。
- 10) 原注：『郭沫若全集・文学編』第11卷351～352頁。
- 11) 原注：『郭沫若書法集』四川辭書出版社、1999年、17頁。
- 12) 原注：『郭沫若全集・文学編』第2卷393頁。
- 13) 原注：『郭沫若題画詩存・題郭開運（野艘）画為張可源二幀』、山西教育出版社、1998年、46～49頁。
- 14) 訳者注：名句を組み合わせて作った漢詩の一種。
- 15) 原注：『郭沫若書法集』四川辭書出版社、1999年、8～9頁。

キーワード 郭沫若 留学 家信 郭開運

(GUO Pingying)